蜘蛛の糸

芥川 龍之介

一

ある日のことでございます。お釈迦様は極楽の蓮池のふちを、一人でぶらぶらお歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のように真っ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、なんともいえないよい匂いが、絶え間なく辺りへあふれております。極楽はちょうど朝なのでございましょう。

やがてお釈迦様はその池のふちにおたたずみになって、水の面を覆っている蓮の葉の間から、ふと下の様子をご覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちょうど地獄の底に当たっておりますから、水晶のような水を透き通して、三途の川や針の山の景色が、ちょうどのぞき眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多という男が一人、他の罪人と一緒にうごめいている姿が、お目にとまりました。この犍陀多という男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事をはたらいた大泥棒でございますが、それでもたった一つ、よいことを致した覚えがございます。と申しますのは、あるときこの男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたをはっていくのが見えました。そこで犍陀多はさっそく足を上げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものにちがいない。その命をむやみにとるということは、いくらなんでもかわいそうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

お釈迦様は地獄の様子をご覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのをお思い出しになりました。そうしてそれだけのよいことをした報いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。幸い、そばを見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけております。お釈迦様はその蜘蛛の糸をそっとお手にお取りになって、玉のような白蓮の間から、はるか下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお下ろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、他の罪人と一緒に、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。なにしろどちらを見ても、真っ暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらございません。その上辺りは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞こえるものといっては、ただ罪人がつくかすかな嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちてくるほどの人間は、もうさまざまな地獄の責め苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですからさすが大泥棒の犍陀多も、やはり血の池の血にむせびながら、まるで死に

2 【釈迦】古代インドの仏教の開祖。
4 【蕊】おしべとめしべ。
8 【三途の川】死者が死後に渡るとされる川。
8 【のぞき眼鏡】箱の底にガラスをはめ、水中の様子を見られるようにしたもの。
7 【翡翠】緑色の宝石。

かかった蛙のように、ただもがいてばかりおりました。

ところがあるときのことでございます。何気なく犍陀多が頭を上げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした闇の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れてまいるのではございませんか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を打って喜びました。この糸にすがりついて、どこまでも上っていけば、きっと地獄から抜け出せるのに相違ございません。いや、うまくいくと、極楽へ入ることさえもできましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございません。

こう思いましたから犍陀多は、さっそくその蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐり上り始めました。もとより大泥棒のことでございますから、こういうことには昔から、慣れきっているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦ってみたところで、容易に上へは出られません。ややしばらく上るうちに、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へは上れなくなってしまいました。そこでしかたがございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下がりながら、はるかに目の下を見下ろしました。

すると、一生懸命に上ったかいがあって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう闇の底にいつのまにか隠れております。それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になってしまいました。この分で上っていけば、地獄から抜け出すのも、存外わけがないかもしれません。犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下のほうには、数限りもない罪人たちが、自分の上ったあとをつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじ登ってくるではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、ばかのように大きな口を開いたまま、目ばかり動かしておりました。自分一人でさえ切れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに耐えることができましょう。もし万一途中で切れたと致しましたら、せっかくここへまで上ってきたこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落としに落ちてしまわなければなりません。そんなことがあったら、大変でございます。が、そういううちにも、罪人たちは何百となく何千となく、真っ暗な血の池の底から、うようよとはい上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせと上ってまいります。今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに切れて、落ちてしまうのにちがいありません。

そこで犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は俺のものだぞ。おまえたちはいったい誰にきいて、上ってきた。下りろ。下りろ。」とわめきました。

そのとたんでございます。今までなんともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぷつりと音をたてて切れました。ですから犍陀多もたまりません。あっというまもなく風を切って、独楽のようにくるくる回りながら、みるみるうちに闇の底へ、まっ逆さまに落ちてしまいました。

あとにはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

12【里】長さの単位。一里は約四キロメートル。

6【肝腎】非常に大切で、欠くことができないこと。

お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしゃいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうなお顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄から抜け出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰を受けて、元の地獄へ落ちてしまったのが、お釈迦様のお目から見ると、あさましく思し召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓着いたしません。その玉のような白い花は、お釈迦様のおみ足の周りに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、なんともいえないよい匂いが、絶え間なく辺りへあふれております。極楽ももう昼に近くなったのでございましょう。

〈出典『芥川龍之介全集 2』（筑摩書房、一九八六年）〉

【著者】芥川 龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）
一八九二（明治二五）年―一九二七（昭和二）年
作家。東京都の生まれ。
【著書】『羅生門』『蜘蛛の糸』『蜜柑』など

5

3 【無慈悲】弱い者に対する同情の気持ちがないこと。
5 【思し召す】「思う」「考える」の尊敬語。
6 【頓着】気にすること。
7 【萼】花の最も外側の、花びらを囲む部分。がく。